

4. 刊行物、主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

4. 1. 刊行物

気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

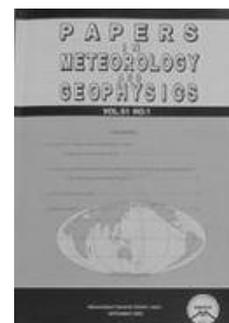
研究成果の学術的な公表を目的とした論文誌 (ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論 (レビュー) を掲載している。平成 17 年度からは、独立行政法人科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム “J-STAGE” に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL : <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

なお、第 65 巻をもって冊子での発行は終了し、オンライン発行のみとなった。

令和 4 年度の発行はなかった。



気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物 (ISSN 0386-4049)。気象研究所ホームページで閲覧することができる。

URL : https://www.mri-jma.go.jp/Publish/Technical/index_jp.html

なお、第 72 号をもって冊子での発行は終了し、オンライン発行のみとなった。

令和 4 年度は第 87 号を発刊した。



第 87 号「気象研究所共用海洋モデル第 5 版」

(坂本 圭・中野英之・浦川昇吾・豊田隆寛・川上雄真・辻野博之・山中吾郎
(全球大気海洋研究部))

4. 2. 発表会・主催会議等

気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年1回開催している。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、令和5年1月21日に、気象研究所ホームページに以下の報告題目動画を掲載し、オンライン開催した。

【報告題目】

- ・線状降水帯のレビューと今年度実施した集中観測の報告
報告者：加藤輝之（台風・災害気象研究部 部長）
- ・線状降水帯の機構解明と予測技術向上に向けた研究の進捗
報告者：瀬古 弘（気象観測研究部 部長）
- ・プレート境界大地震の発生メカニズムの理解に向けて
報告者：野田朱美（地震津波研究部 研究官）
- ・トンガで発生した火山噴火による潮位変化
報告者：高野洋雄（応用気象研究部 室長）

第4回環境研究機関連絡会研究交流セミナー

気象研究所を含む13の環境研究に携わる国立試験研究機関、国立大学法人及び国立研究開発法人が参加する「環境研究機関連絡会」が主催する研究交流セミナー（平成15年度～平成30年度までは環境研究シンポジウムを実施）で、参加する研究機関が成果の発表を行っている。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、12月1日（木）にWebセミナーが開催され、気象研究所は以下の発表を行った。

【口頭発表】

口頭発表テーマ：「環境ビッグデータとその活用」の関連研究

発表名：気象研究所による地球温暖化予測等の気候データ

発表者：保坂征宏（気候・環境研究部 第二研究室長）

【総合討論】

総合討論テーマ：「環境問題解決に向けてデータをどのように作り、活用するか」

話題提供：環境関連データの利活用促進に向けて

発表者：須田一人（気候・環境研究部長）

SAT テクノロジー・ショーケース 2023

つくばサイエンス・アカデミー最大のイベントでありますSATテクノロジー・ショーケース2023が1月26日（木）に3年ぶりに対面で開催され、15分野、108件のポスター発表、特別シンポジウムをはじめ、企画展示や共催機関広報展示、日本弁理士会関東会による発明無料相談の案内などが行われた。

シンポジウム「大雪は忘れた頃にやってくる ～ひとすじ縄でいかない三重の雪予報～」

2023年2月18日（土）三重大学 山翠ホールにて、テレビでお馴染みの気象キャスターが雪の予報についてお話しし、気象研究者が大雪の現状や要因、そして温暖化によって雪はどのように変わっていくのかを話した。

【講演内容】

- ・雪の過去・いま・未来
 - ・研究者×気象キャスター 本音トーク
- 講演者：川瀬宏明（応用気象研究部）